自分のことを語る場を作り、生きる力を育てる
―子どもを支えるきこえの教室の学習のあり方―

千葉県千葉市立院内小学校
金井　あかね

１　はじめに

物心ついた時には隣の家の女の子とよく遊んでいた。１歳年下の補聴器をつけたひとみちゃんという子だった。今思えば幼少期から補聴器をつけた友達と過ごすということは珍しいことであるが、当時の私にとっては、それは特別なことではなく、一つの個性としてすんなりと受け入れていた。

一緒に過ごす中で私は、断片的ではあるものの難聴についての知識に触れる経験をした。ある時、一緒にかくれんぼをしていて、突然ひとみちゃんの補聴器がピーピー鳴り出した。その時に補聴器が耳から外れるとハウリングしてしまうことを教えてもらった。ひとみちゃんが私の名前を「あたたん」ときこえる呼び方で呼んでくることがあり、不思議に思った時に、母から「人はきこえたように発音する」ということを教わった。当時の私は子どもなりに、ひとみちゃんのきこえ方を想像していたことを思い出す。

中学校時代は私が入っていた卓球部にひとみちゃんも入ってきた。放課後や土日も一緒に過ごすことが多くなり、その中で、きこえにくい時にはそのことを話し手に伝え、常に周りに感謝の言葉をかけている姿を隣で見てきた。私の中にある「育てたい子どもの理想像」はこの時のひとみちゃんの姿が基になっている。

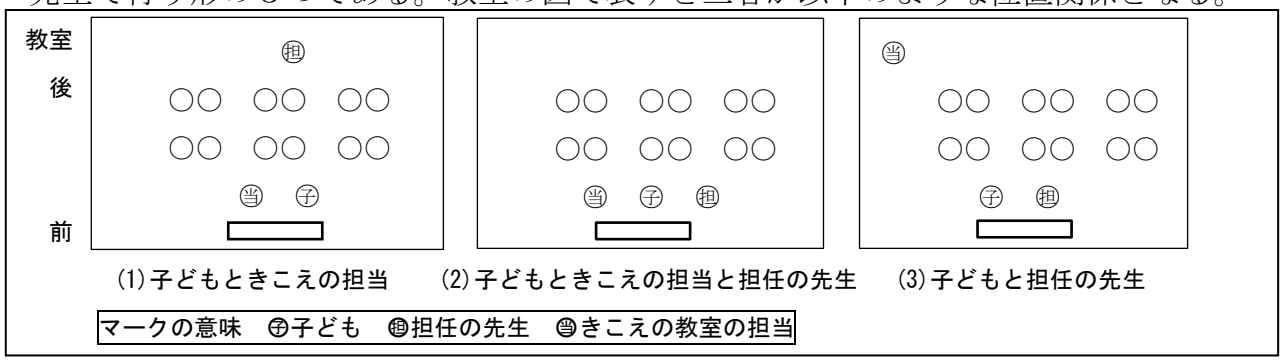
２　研究にあたって

きこえの教室担当になってから７年間、私が担当している子どものクラスで耳のことを語る学習の場を設定し、積み重ねてきた。難聴について知ることで、自然な配慮ができるようになる子どもたちの姿を見てきた。一方、学習の感想で「（耳がきこえにくくて）かわいそう」「つらいんだなと思った」という文面を目にすることも出てきた。幼少期からそのような感情をもったことがない私にとっては、違和感を覚える言葉だった。特に、人工内耳の手術を受けたことを話したＡさんは、「自分にとってきこえるようにするために手術をしたり、伝わりやすい発音を目指して練習したりすることは当たり前のこと。なぜ、それを友達はかわいそうと言うのか。私は人工内耳や補聴器をつけていることをつらいとか、きこえにくい自分をかわいそうだと思っていない。」と個別学習で話し、作文に書いたことがあった。

私はクラスで、担当している子どもたちをかわいそうな子だと思ってほしくて学習の場を設定しているわけではない。一つの個性として受け入れてほしいと願っている。どうしたらいいのだろうかと悩んだ。その後、学習の中で、口元を見てことばを類推しながらきき取っている子どもたちの努力に注目できるようにしたり、メガネから補聴器のことを考えたりすることで、伝えたいことがクラスの子どもたちにわかるように意図的に働きかけてきた。内容だけではなく、担任の先生との連携の工夫を考え、よりよい形を見つけようと模索してきた。今回、今まで取り組んできたことを整理してみた。

3　実践の内容

振り返ってみると３つの形で学習を行ってきた。まず、子どもときこえの教室の担当とで行う形、次に子どもときこえの担当と担任の先生で行う形、最後に子どもと担任の先生で行う形の３つである。教室の図で表すと三者が以下のような位置関係となる。



［図１］自分のことを語る学習の形

（1）　子どもときこえの担当

きこえの教室に通う子どもの中には、人前で話すことが苦手だったり、経験を積んでいなかったりする子どもが少なくない。個別学習で話す内容を一緒に考え、発表原稿を読む練習を何度も行い、自信をつけてから本番を迎える。本番でもきこえの担当が隣にいて、ナビゲートすることで、安心して発表できるように配慮して進めていく。回数を重ねる度に、子どもが話すコーナーを増やしていく。徐々に、きこえの担当は補足説明のみの登場で、全てのコーナーを子どもが話す形の学習を行うことが可能になっていった。

音の大きさの説明

担当：これからＡ君がきこえの教室で勉強した音の大きさについて発表します。Ａ君出てきてください。

Ａ：この図は上が dB で小さな音、下が 120dB で大きな音です。
一番かすかな音（0dB）木の葉の音（10dB）
ひそひそ話（20dB）少し大きい人の話し声（70dB）
電車の音（90dB）ジェット機の音（120dB）です。

音の大きさクイズ

担当：それでは、音の大きさクイズをします。Ａ君が問題を作りました。当ててください。

Ａ：ぼくは、この騒音計を使っていろんな音をはかってきました。クイズを出します。
・応援団長の声は何 dB でしょう。
・静かなときのきこえ２組は何 dB でしょう。
・テストのときの４年３組は何 dB でしょう。
・音楽で合唱をしている時は何 dB でしょう。

担当：それでは、今からこの教室の音をクイズにします。

Ａ：やり方の説明をします。今からクイズの紙を配ります。音の大きさを予想して書いてください。予想する場面は
①全員が音をたてない
②全員であいさつ
③先生が朝の会で話している
④１番後ろの席の子が音読をしているの４つです。
それでは、予想を書いてください。今からはかります。

担当：予想が当たっていた人はいますか？クイズはここで終わりです。Ａ君がみんなへ作文を書いてきました。きいてください。

子どもの話

Ａ：ぼくは５歳から補聴器をつけています。きこえの教室で音の高さや大きさの勉強をして、自分の耳は特に高音がよくきこえないことを知りました。そして、補聴器をしていても 40dB の音がやっときこえるくらいだということがわかりました。そこで、みんなにお願いがあります。40dB よりもざわざわしている教室だと先生の話をきき漏らすことがあるので、静かになるように椅子にマットをつけて欲しいです。きこえの教室に行くのは嫌だなと思っていたこともあったけど、今はみんなに話を伝えられて楽しいです。これからも、よろしくお願いします。

感想

担当：感想はありますか？

子：静かな教室は 0dB になると思っていたのに違ってびっくりしました。

子：前、補聴器体験をしたときにとてもうるさかったです。少しでも静かにできるようにしたいと思いました。

手話の歌

担当：最後にＡ君と一緒に手話の歌ビリーブを歌いましょう。

［資料１］　子どもときこえの担当　展開事例

（2）　子どもときこえの担当と担任の先生

その後、自分のことを語る学習を行う際に、担任の先生に参加してもらいたいという願いをもつ子どもが出てきた。特に宿泊学習などの行事に向けての内容では、困りそう

な場面を事前に伝え、学級会のように作戦を班で考えてもらった。

＜事前の話し合い（個別学習）＞
担当：みんなが雑談きいて笑ってたりするでしょ？その時どうするの？
　Ａ：教科書見てるか、笑ってるマネをする。
担当：笑ってるマネするんだ！あはははって言ってるの？きこえないのに？
　Ａ：うん。
担当：そんなことしてるんだ！何でみんなに合わせてるの？
　Ａ：何で…わかりません。
担当：何となくやっちゃう？
　Ａ：うん、まあ、そうね。
担当：そうなんだ…。先生の面白い雑談をききたいわけ？わかるようになりたいの？
　Ａ：えっと…（沈黙）
担当：無理ってあきらめてるの？
　Ａ：（絞り出すような声で）ききたい…。
担当：ききたい。本当はききたいのね。それをみんなに何か工夫してもらえれば、きけるかもしれないよ。
　Ａ：うん。

＜自分のことを語る学習＞
難聴疑似体験
担当：今からきこえにくい状態を作るために、耳栓をまず入れて、その上からイヤーマフをつけてもらいます。
担任：右手をあげてください。左手をあげてください。両手をあげてください。みなさん座りましょう。
（難聴疑似体験をしながら、三文字しりとりをざわざわした状態でやってみます。）
担任：どんな感じでしたか？
　子：自分だけ取り残されている感じがした。

対談
担当：雑談、給食の時の話とか、休み時間の話とかが「どうせわかんないしな」ということを５年生の終わりから言い始めました。６年生になってどうですか？
　Ａ：６年生になっても５年生の時と変わらない。
担当：授業中も先生が教科書以外の話、面白い例え話とかするけれど、きこえないんだよね。
　Ａ：わかりません、先生もう一度その話を教えてくださいとは授業中だから恥ずかしくて言えない。
担当：給食の時とかは、グループで話している内容はわかるの？
　Ａ：わかるときとわからないときがある。
担当：わからないときはどうするの？
　Ａ：黙って給食を食べている。

宿泊学習で困る場面
担当：バス、何で困るんだろうか。２時間あるの、鴨川だから移動教室よりも長いです。何かやるの？
　子：バスレク！
　子：バスレクできこえなかったり…
　子：歌とか歌うの。
担当：だからそこが心配だなってのが一つ。
担当：カッターは？
　Ａ：補聴器に水がかかってしまうかもしれない。外したらきこえない。
担当：ナイトハイクは？
　Ａ：暗いところだから周りが見えなくて口元も見えない。
担当：起床は？
　Ａ：補聴器を外していて、起きられるか心配。

みんなで作戦会議
担任：みんなの考えた作戦を発表してもらいます。
　子：口を大きく動かして話す。
担任：口を大きく動かして…これは普段の生活全部に共通するね。
　子：ナイトハイクで、ペアになった男子がしゃべる時に、Ａが懐中電灯を持って、その人の口元を照らしてしゃべれば口元が明るくていいと思う。
担任：なるほど！口元を照らす！それはナイトハイクならではだね。
　子：ナイトハイクで、ペアになった人がＡを優しくエスコートする。
担任・担当：エスコート！
担任：いい言葉が出たね。よく知ってるね。
　子：起床では、体を揺らして起こせばいいと思う。
担任：同じ部屋の人がやれるといいね。

担当：どんな気持ちですか？今。
　Ａ：あまりこういったことを考えてもらったことがないから嬉しい。
担当：ちょっとの工夫で不便なところがなくなるので、宿泊学習ではお願いします。

［資料２］　子どもときこえの担当と担任の先生　展開事例

（３）　子どもと担任の先生

クラスで自分のことを語り、理解を得ることに成功した経験をした子どもが、学年に向けて発信したいと考え、担任の先生に相談した。きこえにくい場面で助かる行動について劇を作り、学年集会で演じることが決まった。場面と助かる行動を黒板に書き出し、細かな状況やせりふや配役をクラス全体で相談し、全員参加の劇を作り上げた。

＜事前の話し合い（個別学習）＞
担当：宿泊学習にむけてクラスでお願いしたけれど、行ってみてどうだったの？
　Ａ：みんなと話せたし、楽しかったよ。お風呂がきこえにくいかと思ったけど、気にかけてくれた子がいた。男の先生の声がよくきこえないけど、近くの子にきいたら内容を教えてくれた。
担当：それは勇気を出してみんなにお願いした成果だよ。みんなにもお礼を言ったほうがいいよね。
　Ａ：今度またみんなの前で伝えたい。あと、最近、違うクラスの子に声をかけられた気配を感じたんだけど、よくきこえなくて無視してしまったんじゃないかと不安になったことがあった。学年でもやれたらいいのにな。
担当：どういう感じでやるか担任の先生に相談してみようか。
　Ａ：やりたいけど。１００人近い人の前で話すのは勇気がいる…。
担当：同じクラスの子たちに手伝ってもらえたらいいのかな。
　Ａ：うん。例えば劇とかコントとか。暗い感じにしたくないし。

＜自分のことを語る学習＞
担任：今日はＡさんからみんなに伝えたいことがあるそうです。きいてね。
　Ａ：宿泊学習前に不安だということを伝えたら、当日みんなが自然に声をかけてくれて楽しく過ごせました。本当にありがとうございました。この学級の皆さんには耳のことをわかってもらえていますが、ほかのクラスの人には知らず知らずに迷惑をかけてしまっていると思ったので、今度学年で耳のことを話したいと思います。中学校でもみんなにわかってもらいたいので、やってほしいので協力してください。今考えているのが、体育館できこえにくい時にやってほしいこととかを劇にしようかと思って。

子：おー！いいじゃない！
子：俺出るよ、先生！（爆笑）
子：僕も！私も。全員参加だよ。（感極まった先生が涙）
子：先生！！（拍手）
担任：じゃあ、みんなで台本を書いてやろう。
Ａ：劇頑張るぞ！
子：オー！

＜みんなで作った劇の一部＞
ナレ：廊下での出来事
友１：（後ろから）Ａ！
Ａ役：（すたすたと歩いて行ってしまう。）
友２：あれ、行っちゃったね。何で無視するんだろう。
Ａ：後ろや遠くから話しかけられるときき取れずに無視したようになってしまうことがあります。今までもそういう場面があったかもしれないので申し訳ないなと思っています。後ろからではなく近くに来て前から話しかけてもらえるときき取れます。
ナレ：近くで話しかけると
友１：（後ろから現れ、前に回りこんで）Ａ！Ａ役：何どうしたの？
友２：今日の帰りきこえにいくの？ないなら一緒に帰ろうよ。
Ａ役：うん、ＯＫ！帰ろう！
Ａ：このように、話しかける時は近くに来て前から話しかけてください。

☆その他、「帰りに４人で横並びになって話す時にきこえないので中央に位置どりしたい」「音楽の時間にリコーダーの音が苦手で耳栓をするため指示をホワイトボードに書いてほしい」「外国語活動の時にみんなの声が混ざって先生の指示がきこえないので静かにしてほしい」「給食当番などマスクをする場面ではこもった声がきこえないので、身振り手振りをつけて話してほしい」ということをクラスで学年に向けて演じた。

［資料３］　子どもと担任の先生　展開事例

中学校できこえの通級に行かなくなる子どももいるため、（３）子どもと担任の先生の形を経験しておくことが今後につながると思われる。しかし、どのクラスでも（３）の形を行えばいいというわけではなく、担任の先生の良さや学級経営を壊さない取り組みのバランスを担当が見極め、進めていくことが大切であると実感した。

６年間の学習を積み重ねてきた卒業生からは、「担任の先生が理解してくれたことで友達の理解が進み、過ごしやすくなった。」という話をきいた。この卒業生は中学校に進学して教科担任制になってからも、ＦＭ補聴システムの使用をお願いすることができた。小学校での経験から、自ら働きかけることできき取りやすい環境を作ることができることを学んでいたからこその行動だった。また、「同じ小学校で学習を受けてきた周りの子どもたちの接し方を見て、他校から進学した子どもたちも目を見てゆっくりと話しかけてくれるからわかりやすい。」と話した。自分が理解してもらおうと努力した結果が、回りまわって啓発の連鎖として広まった例だった。また別の卒業生からは、「６年生の時に、担任の先生と学年に向けて自分の耳の状態を劇にして発信したことで、中学校で改めて話さなくてもいろいろわかってくれている状態だった。きこえの担当とやった授業の時よりも、クラスの友達の注目度が高まり、とても効果があると実感した。」との報告があった。

４　おわりに

自分のことを語る場を設定し、学習を行ったきこえの教室の子どもは、クラスの友達からの励ましを受け、自信をつけることができたため、その後の生活で困難がやってきても乗り越えることができた。そして、自分のきこえにくさを伝えることで環境が変わるという経験を積むことができた。クラスの子どもたちは、難聴に対しての知識を身に付け、きこえの教室の子どもを支える存在に成長していった。担任の先生は、クラスの子どもたちと同じように、難聴の知識を身に付け、日々の授業に役立てることができていた。

自分のことを語る学習は、きこえる、きこえないという問題に立ち向かうものではなくて、世の中の少数派の人が暮らしやすくするために行ったり、周りの人が困らないように自分の特性を伝えたりするツールであると考える。今後、食物アレルギーや発達障害などの分野でもこの学習が広がっていくことで、きこえの教室の子どもだけが特別ではなく、お互いの特性を認め合うクラスや学校になっていくと考える。これからも、様々な角度から展開の可能性を考え、子どもを支えることができる学習を行っていきたい。